

外国語学部アジア学科主催，アジア・太平洋研究センター／東南アジア学会中部例会共催シンポジウム

日 時：2012年3月17日（土）

場 所：名古屋キャンパス J棟1階 特別合同研究室

テ ー マ：東南アジア華人研究の歩みと展望

趣旨説明：小林 寧子（南山大学教授）

報 告 者：篠崎 香織（北九州市立大学准教授）

片岡 樹（京都大学大学院准教授）

津田 浩司（東京外国語大学助教）

コメンテーター：原 不二夫（南山大学教授）

第1 報告

「華僑から華人へ」論の意義と限界——マレーシアの事例から

篠崎 香織

華僑華人研究において、「華僑から華人へ」という視点が長らく基本命題となってきた。それはマレーシアの華人を対象とした研究においても同様である。この視点は、出自を中国に持つ個人について、その行動や選択を安易に中国という出自で説明せず、その個人が身を置いている場の文脈や論理をふまえて説明することを目指すものである。マレーシアの華人に関する研究は、この視点を基本命題としてきたため、華人について理解を深めただけでなく、彼らがマレーシアという場で関係・交渉・協働する他の民族集団についての理解を深め、マレーシアという場そのものについての理解を深めるうえで大きな意義をもたらすものであった。

他方で「華僑から華人へ」という視点は、個人の帰属意識のとらえ方を硬直化させてしまう側面もある。この視点に基づくと、個人の帰属意識は出自国から居住国に一方通行的に移行していくという見方に陥りやすくなる。また、個人の帰属意識は出自国か居住国かの二者択一であり、帰属意識の終着点は国家であるという見方にも陥りがちとなる。こうした硬直化した帰属意識のとらえ方は、「1人の個人に1つの国籍」が規範であった20世紀においては、ある意味で仕方がないものだったかもしれない。だが昨今では、ヒト、モノ、カネ、情報の越境が飛躍的に増大する中で、移民送り出し国家を中心に二重国籍を認めるケースが増加するなど、20世紀の規範が崩れつつある。国家と個人が相互に国籍にまつわる権利と義務を吟味し、新たな関係性を結ぶ

状況が進展している。

本報告は、こうした今日的な状況において、「華僑から華人へ」という視点がマレーシアの華人研究にどのような意義をもたらしてきたかを確認しつつ、その視点が現在どのように相対化されようとしているのかを軸として、マレーシア華人研究の歩みと展望を論じる。

まず、帰属意識の転換に注目した研究を取り上げ、それらの研究がどのような状況のなかで進展してきたのかを確認する。次に、帰属意識のとらえ方を硬直化させない試みを、原不二夫氏の2つの研究から読み込む。最後に昨今の研究をその試みの延長線上にとらえ位置付けてみる。

以上の議論を通じて、今日のマレーシアの華人を対象とした研究においては、個人の行動や選択を出自で説明することに慎重でありつつ、個人がどこに生きる場を設定し、誰とどのように関係性を築くのかを丁寧に捉えようとする研究が展開しつつあることを示し、今後の展望としたい。

第2報告

中国人，タイ人，そして唐人——タイ華僑華人帰属意識の諸層

片岡 樹

タイ国における華僑華人、およびその文化や社会的位置づけを考える上で、マレーシアの事例は非常にユニークな参照項となる。原が詳細に明らかにしたように、マレーシア（当時のマラヤ）においては中国帰属意識からマラヤ帰属意識への転換が進行した。中国人から中国系マレーシア人へという自己規定の転換である。この図式をタイ国の事例にあてはめようとすると、そこには非常に興味深いねじれが存在することに気づく。タイ国において「中国人からタイ人へ」という同化の図式を提唱したのはスキナーである（と言われている）が、1990年代以降のタイ華僑華人論においては、むしろこの図式を批判することが主流となっているのである。しかもそうしたスキナー批判の多くが指摘するのは、中国系住民においては民族意識のレベルでは華人でありつつ、国民カテゴリーとしてはタイ人であると主張するという二つの次元の使い分けがなされているという点なのである。これは実のところ、マレーシアではホスト国への同化の典型的パターンとして扱われるべき事象である。なぜこのような奇妙なねじれが生じるかを問うことは、そのまま近代国民国家としてのタイ国のありかたを問うことにつながる。タイ国においては国民カテゴリーとしてのタイ人と民族カテゴリーとしてのタイ人とが概念上曖昧に併存しており、そのため「タイ化」が何を意味するのかが話者によって混乱するという状況を招いている。これはタイ国がタイ族

国家なのか多民族国家なのかという、ナショナル・アイデンティティをどう規定するかに直結する問題であり、それゆえ識者のあいだで論争のつきない話題となっている。華僑華人のタイ化論をめぐる混乱は、まさにそうしたナショナル・アイデンティティ論争の幅を直截に反映する徴候だということができる。

ところで「中国人からタイ人へ」という用語法は、別の意味でも誤解を与えやすい。これだとあたかも中国人としての自己規定がはじめから存在するかのような論点が先取りされてしまうからである。しかし実際に人々が中国への帰属意識を自覚的に標榜するようになるのは20世紀に入ってからであり、それ以前からもホスト社会への同化や自他弁別の論理は作動していた。当時は唐人と呼ばれた人々がホスト社会に徐々に吸収されていくというのが近代国民国家以前のありかたであり、国民国家のジャーゴンが普及しこのプロセスが一時的に遮断されるに及んでようやく人々は中国人になっていったと考えた方が適切である。唐人たちが体現していたのがローカルな土着化だとして、そうした側面にはこれまでじゅうぶんな注意が払われてこなかったように思われる。タイ国からマレー半島にまたがる本頭公祭祀への着目は、近代国家のジャーゴンにさらされる以前から移住者の土地への愛着を体現しつつ現在まで維持されてきたものであり、本頭公への着目は、そうした側面に光を当てつつタイとマレーシアを連続的に理解する上でひとつのヒントを提供しうる可能性がある。

第3 報告

ローカルな場からのミクロな研究の可能性：インドネシアの事例から

津田 浩司

インドネシアではスハルト体制下（1960年代後半～98年）に、華人を不可視化する「同化政策」が採られ、「華人は現地社会に同化しているか否か」ということが政治的・社会的に大きな問いとなった。華人社会に関する実地研究が困難となる中、アカデミズムも多くの面でこの問題構成をなぞることとなった。確かにそれは、表面的に目につく「華人らしさ」が社会的関心事となっていた状況下においては、ある程度妥当性のある議論であったかもしれないが、しかし「華人は華人性を持っている」ことを自明の前提として対象を設定し、その当人のアイデンティティや「華人性」を問い続けた上で、結論として「華人は（程度の差は別として）華人性を持っている」とするようなあり方は、循環論そのものである。

インドネシアにおいてはスハルト期に、上述のごとく「華人」が執拗に同定され続ける一方で、「華人性」が要素として対象化され、規制（不可視化）された。ポスト・スハルト期になって対華人政策が大幅に見直されると、「華人性」にまつわるもの

の表出は自由となったが、特に若・中年層はいわゆる「華人文化」に対しもはや馴染みのない状態となっており、(極めて素朴な意味において)「華人が華人らしくない」。こうした背景から、いまインドネシア(特にジャワ)で華人を研究する者にとっては、「華人は華人性を持っている」という前提=結論が現実には即さないものとして、その限界性が比較的に見えやすくなっているのは事実だろう。とはいえ、こうした循環論、すなわち、華人であると(当人が研究者によって)予め何となく同定された人のところに赴き、彼らがどれだけ「華人らしさ/華人性」を持っているかを問うような議論の立て方は、華僑華人学全体の大きな課題として正面から問われてゆくべきことであると考える。

報告者はこれまで、ジャワの一地方小都市で、人々が日常の暮らしの中でいかに「華人らしさ/華人性」を生き、またそれを意識化したり主張したりするかを微細に研究してきた。本報告はその試みを紹介するとともに、ひとつの事例として、「華人が中国語を学ぶ」という具体的現象をどう分析・評価するかについて、ごく簡単に示す。中国語を日常的に話さなくなった華人たちが再びそれに目を向け始めるという現象は、ともすれば「失われた父祖の言語」を回復する動き、すなわち「再中国/華人化(Resinicization)」の現れであると結論付けられがちである。しかしながら、「華人」や「華人性」、あるいは「中国的要素」のみに過度に注目せず、またそれらを安易に結びつけて抽象的に何がしかを語るのではなく、人々の生活のコンテクストに即しつつ理解してゆくと、別の側面や別の新たな問いが浮かび上がってくる。そしてそのようなローカルな場からのミクロな研究こそが、循環論を乗り越えるための(特効薬ではないにしても)ひとつの道筋を切り拓く可能性を持つものであることを指摘する。

コメント

原 不二夫

1. 原の論評と質問

第1報告について

「華人の帰属意識」という問題について、精緻、綿密な歴史研究によって、単に「華僑から華人へ」とされてきた視点の欠陥を指摘された点に、深い敬意を表する。これによって、より正確な華人社会の実像が明らかにされた。篠崎氏の分析視角は、時代背景の分析も行っており、ある特定の歴史的時点の解明には非常に有効で、また私の分析よりずっと精巧だけれど、長い期間の質的変容の分析、という点では、重要

な点を軽視する結果になるのではないか。

第2報告について

「マラヤ化」もしくは「マレーシア化」と「タイ化」とは全く違う。マレーシアでは「マレーシア人」と「マレー人」の区別は明らかだが、タイでは「タイ人」は「タイ民族」なのか「タイ国籍者」なのか不明である。タイでは、まず「唐人」社会が形成され、民族国家の形成とともに「中国人」、さらには「タイ人」意識が形成された、との指摘は興味深かった。マレーシアでも「唐人」意識が掲載されていたのかなどをご教示いただければ有難い。

第3報告について

一群の人々を「華人」と設定した上で「華人性」を問うのは循環論だ、スハルト後の「華人らしさ」の表明は「再華人化」ではない、との問題設定は、興味深く、また説得力がある。では、何をどう見ればいいか、という具体例を示していただけたら、と思う。例えば、スカルノ時代の華文教育熱と現在の華文教育再興とはどう違うのか、マレーシアの中国性維持とインドネシアの中国性維持とはどう違うのか、などについて。

2. 質疑応答

この後、出席者から、現在世界では、華人でなく「華裔」という言葉が一般的になっているのではないか、「華人」はいつ頃から使われ始めたか、1960年代の日本の華人研究はどのようなものだったか（以上は、むしろ原への質問だったので、「フィリピンやシンガポールでは確かに『華裔』が普及しているけれど、その他の国はそこまでいっていない」「『華人』は1947年頃からマラヤ、シンガポールで使われるようになり、中国では1980年から公式に採用された」「60年代はまだ戦前の研究の延長と言えた」などとお答えした）、スハルト時代に「チナ問題」がタブーだったのはなぜか、インドネシアではジャワ以外の華人の状況はどうか、タイでは混血はどの程度進んでいるのか、タイの華人は「タイ人」という認識なのか「華人」という認識なのか、など活発な質問が出され、講師から回答が寄せられた。

(文責：原 不二夫)

東南アジア華人研究の歩みと展望



篠崎 香織 (北九州市立大学)



片岡 樹 (京都大学)



津田 浩司 (東京外国語大学)



原 不二夫 (センター研究員)



会場の様子